

国語科成立10年前の教科書から

著者	甲斐 雄一郎
著者別名	Kai Yuichiro
雑誌名	つくばね : 筑波大学図書館報
巻	27
号	1通103
ページ	3-5
発行年	2001-06-29
URL	http://hdl.handle.net/2241/10412

性において、その基本的性格をほぼ維持してきているからだ。本学附属図書館は、いぜんとして残存していた個人文庫の性格を払拭し、そのような総合性を保証した画期的な方式（集中管理と全面開架）を採用しているが、これこそ、15世紀以来の大学図書館が目指してきたものの制度的な到達点なのであった。

しかしながら、その基本的な性格こそが、現在おおきな試練に立たされているように思えてならない。図書館は、なにか急いで調べものをするところであり、それはあらかじめ検索した文献の必要な箇所を複写する場所となってしまうと、ゆっくりと本を探して、ゆったりと本を読むというところではなくなってきている。それどころか、研究のプライオリティの国際競争にさらされている研究者にとっては、研究室から直接アクセスできるオンライン・ジャーナルや文献情報データベースだけが図書館との唯一のかかわりになってきているような状況も生じてきている。また、なにか調べものをするところといったが、それさえもあやしくなっている。閲覧席に堆く書物を

積んで、熱心にノートをとっている学生の姿は、いまではきわめて稀になった。それに、個人文庫に慣れ親しんできた教員の図書館に対する意識が書物の購入意欲の減退というかたちであらわれてきている気配もある。極度の専門主義や業績主義の慌ただしさが図書館の総合性を脅かしているのではないかという認識は、明らかに被害妄想なのだろう。しかしながら、書棚のあいだを逍遙し、気になる本をふと手にするときの愉悦などは、はるか遠い昔の思い出、ひょっとすると自分で勝手に描いてしまっただけの15世紀の大学図書館の幻影なのかもしれない。判断を一步誤れば、図書館どころか、大学そのものの存立にかかわる重大な影響を及ぼすことになりかねないグーテンベルク以来のIT革命と「構造改革」の大状況は、巨大大学の片隅で紙魚（しみ）のような生活をおくってきただけの隠者に、なんの因果か、歴史の重みを越えて、想像を絶した緊張感を強いてくれている。

（やまうち・よしふみ 附属図書館長）



国語科成立10年前の教科書から

甲斐雄一郎

教育研究科国語教育コースで私が隔年に開講している「国語科教育史」は、原資料に基づいた参加者相互の討論を通じて、我が国の国語科教育の目標設定、教材選択、教育実践にかかわる諸問題について歴史的な位相から構造的に理解することを目指している。そしてそれは本学が東京教育大学から引き継いだ、宮木文庫をはじめとする膨大な教科書コレクションの存在があっちはじめて可能となる時間なのである。ここではこの授業の筋道の一部を紹介することによって、国語科教育史を考えるうえで本学所蔵の教科書群が持つ意味の一端を述べたいと思う。

義務教育における国語科は、1900年の「小学校令」においてそれまでの読書・作文・習字科を統合して成立した。この時の国語科の目標は「国語

八普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓発スルヲ以テ要旨トス」と規定されていた。1998年に告示された学習指導要領では国語科を「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」教科として定めている。国語科の目標を、言語による理解力・表現力の養成としてとらえるならば、成立以降今日に至るまで一世紀の間、一貫していたということになる。ただし「要旨」の後半部において「啓発」することが求められている「智徳」のとらえ方によって、国語教育史を連続しているともみるか、断絶しているともみるか、その評価はわかるであろう。

この時「智徳」の實質を決定していたのは、教科書に掲載すべき教材に関わる「其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科其ノ他生活ニ必須ナル事項ニ取り趣味ニ富ムモノタルヘシ」という規定であった。読むことの指導については「修身、歴史、地理、理科其ノ他生活ニ必須ナル事項」を教材として網羅した教科書を用いて「智徳」を啓発することも成立時の国語科の目標であったのである。

目標設定における二元論ともいべきこうした規定は1886年の小学校令のもとで定められた「小学校ノ学科及其程度」における読書科までさかのぼることができる。そしてこの構造は1904年の国定教科書使用開始以降も継続し、1933年使用開始の第四期国定教科書の編集時にいたるまで規定している。国語科は成立以前から言語の教育としての目標のみならず、教科書教材として選択された題材に固有の目標もまた教科の目標として担われてきたのである。

ここで素朴な疑問として生じるのが読書科、そして国語科における教材の独自性ともいべきことである。成立当時の教育課程において、尋常小学校には地理、歴史、理科は位置づけられていなかったものの、高等小学校にはそれらの教科はそ

れぞれ位置づけられていた。したがって読書科や国語科の教科書として掲載すべき地理、歴史、理科等に関わる教材と、当該教科の内容とをどのような関係として考えたらよいか、そして読書科、あるいは国語科の教材としての独自性はどこに見いださうのか、という問題である。

この問題がもっとも切実だったのは、当時の検定教科書の編集者たちであった。1886年以降、教科書の検定制度が開始されたのだが、それぞれの教科書を編集するに際しては、当然このことについての一定の方針を打ち出し、しかも文部省の検定に合格する必要があったからである。本学にはこの後3年の間に刊行されたものに限っても、文部省の編集・発行によるものを含めて十余種の高等小学校読書科用の教科書が所蔵されている。それらはいずれも独自の視点から読書科の教科書編集に取り組んでいる。

文部省の『高等小学読本』（1888-89年）でみるならば、緒言において読書教授の目的を「諸般ノ學術、工芸ノ端緒ヲ開クニ在ル」とし「修身、地理、歴史、理科、及び農工商ノ常職ニ要用ナル事項等ヲ、其主意ノ難易ニ従ヒ、交互ニ錯出」したとしている。当然のこととはいえ、1886年の規定



「潮汐」に関する理科教材（小野太郎1887『小学理科書』巻之三）と読書教材（文部省『高等小学読本』巻五）

を踏まえた編集であることの強調である。西村正三郎・池永厚共編による『高等小学読本』（1887年、普及舎）も同様の方針を明らかにしている。

この二つは歴史的教材については、ともに古代から近代までの教材を掲載しているという点で共通している。歴史科の内容を網羅しているのである。しかし地理的教材については、文部省の教科書が日本・外国の主要都市に関する詳細な教材を数多く掲載しているのに対し、西村・池永の教科書では北海道、小笠原島、琉球、そして東京というように、当時の日本の中心地と周縁地域についての教材を掲載しているにすぎない。理科的教材については、理科に関わる教育内容と比べるならば当時の理科は「人生二最モ緊切ノ関係アルモノ」としての動植物等に関する博物的な知識、また「日常児童ノ目撃シ得ル所ノモノ」としての自然現象や日用器具の作用などについて取り上げる教科として規定されていた。文部省編集のものは、理科の内容として例示された素材をほぼそのまま網羅して解説している（前頁写真参照）。それに対し西村・池永の編集による教科書は博物的な知識にくわえて物理学、化学一般の知識を授けることを目的として編集されており、教科としての理科の内容よりもさらに高度なものになっている。

一方、のちに東京高等師範学校校長、さらには東京文科大学学長をつとめた三宅米吉の編集に

よる『高等日本読本』（1888年、金港堂、新保磐次との共編）では「本書第五卷以上八専文学二傾キテ理科経済等ノ事実ヲ知ラシムルコトヲセズ」というように、かならずしも文部省の規定にはしたがわず、「文学」を教えるための教科書編集であることを宣言している。そのために理科的教材や地理的教材はきわめて少なく、歴史的教材についても、文学史上の物語に取材したものを掲載することによって編集方針を貫徹しようとしているように思われる。

これらはそれぞれ地理、歴史、理科等の教科の内容を検討したうえでの読書科という教科に対する編集者たちの教科観の表明であるといえるだろう。そしてその内容は当該教科の進展、教育課程の変化にともなって変化せざるをえないものであった。したがって私たちが本学の明治期教科書コレクションで手にとることができるこの前後以降の検定教科書群による多種多様な読書科、国語科の教材構成のあり方は、その時々におけるこの教科の固有の存在意義の考え方についてのそれぞれの提案であったとみることができる。そしてそれら数々の提案は一世紀余を隔てた私たちにも、これらからの教育課程と国語科の考え方についてさまざまな刺激を与えてくれるのである。

（かい・ゆういちろう 教育学系助教授）

本学教官寄贈著書紹介

平成12年12月～平成13年4月に寄贈を受けた本学教官の著書を紹介します。

（敬称略、寄贈者五十音順、〔 〕内は配架場所と配架番号です。）

秋山学（文芸・言語学系）

- ・教父と古典解釈：予型論の射程。創文社、2001
〔中央 132.1-A38〕

池田裕（歴史・人類学系）

- ・死海文書Q&A。ミルトス、2000〔中央 193.02-I32〕

伊藤益（哲学・思想学系）

- ・旅の思想：日本思想における「存在」の問題。

北樹出版、2001〔中央 121-I89〕

岡部克己（心身障害学系）

- ・Educational rehabilitation and nursing for aphasics in Japan : an interdisciplinary Model / Toshiko Okabe. University of Tsukuba and Tokyo Metropolitan University of Health Sciences, 2000〔中央、体芸、医学 496.9-O37〕

角井博（芸術学系）

- ・墨跡の鑑賞基礎知識 / 寺山旦中共著。至文堂、2000〔体芸 728-Te67〕